



TITLE:

Repetition in Yeats's Poetry(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Nishitani, Mariko

CITATION:

Nishitani, Mariko. Repetition in Yeats's Poetry. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19350>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	西谷 茉莉子
論文題目	Repetition in Yeats's Poetry（イエイツ詩における反復）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、ウィリアム・バトラー・イエイツ(1865-1939)の詩作品における、詩の技法としての反復に着目し、イエイツが詩人として成長していく過程において、反復の用法がどのように変化したかを研究するものである。イエイツ自身が技法としての反復について述べた記述は存在しないが、彼は、反復を使うことの利点を意識し、その時々々の詩作の目的に適うよう、この技法を段階的に発展させていった。本論文では、初期から晩年までの、長い期間に書かれた詩の中から、反復を特徴的に使っているものを年代順に取り上げ、詳細に検討することを通じて、それぞれの時代においてイエイツが詩の伝統に対してどのような姿勢をとっていたのかを明らかにしている。特にイエイツは、詩の形式を主題と深く関わらせる傾向があるため、オカルトや魔術の研究、詩の朗読実験、アイルランドの文化的ナショナリズム、二十世紀前半の政治的事件、民衆文化など、イエイツとその思索を取り巻く文脈の中で、詩のテキストの分析を試みている。</p> <p>本論文は、序論、本論五章、ならびに結論から構成されている。序論においては、詩の技法としての反復の重要性と、そのイエイツによる意識的な使用、ならびに、段階的な発展が述べられ、ついで、先行研究が概観される。ここでは、先行研究の多くが、反復を他の議論の一部として、あるいは個々の詩の作品論の一部として扱ったものであり、論考の中心に据えたものはほとんどないことが確認される。また、その理由として、反復が単なるレトリックであるとみなされ、重要なテーマとして認識されてこなかったことが指摘される。そして、イエイツの反復の技法を議論の中心に据えることによって、彼の作品を新たな視点から眺めることができるのではないだろうか、という問題設定が明示される。</p> <p>本論文の核となる全五章は、1890年代の詩を扱っている第1章から、1930年代後半の最終期に書かれた詩を分析する第5章まで、年代順に並べられ、詩人としてのイエイツの変化を通観できるようになっている。以下に各章ごとの内容を要約する。第1章 Repetition and Magic in Early Poemsでは、まず、初期のイエイツが詩を魔術の呪文と同一視していたことを指摘し、一幕劇<i>Cathleen ni Houlihan</i> (1902) で使われている反復には観客への催眠効果が念頭に置かれているという推論を提示したうえで、晩年の詩“Man and the Echo” (1939)において、イエイツ自身と想定される話者が、この劇に対して過剰なまでの悔恨を示す理由のひとつに、反復の効果に対する信念が挙げられる可能性が論じられる。また、イエイツが単なる装飾として反復を用いたわけではないという議論の根拠として、1890年代に書かれた三つの詩を詳細に検討し、これらにおける反復の呪文的効果を指摘している。以上によってこの章では、反復の言葉が持つ自己と他者に対する暗示力が、イエイツの生涯の信念であり続けたものの、世紀末以降、朗読のための詩を書かなくなることと同調するかのよう、呪文と似たものとして使われていることを明示するような反復の用例が激減することが論じられる。</p> <p>第2章 Refrain and Audiences in the Early 1910sでは、1900年から1910年にかけて起こったさまざまな事件を通じてイエイツが経験した、カトリック中産階級との</p>			

軌轢の中で、1910年代における、彼の聴衆に対する考えとリフレインの使い方の関係を考察する。具体的には、1910年代前半に書かれたバラッド “Beggars to Beggars Cried” (1914)のリフレインの使い方が、それまでのものとは顕著に異なり、「不調和」で「歌の調べにのせられない」という特質を持つという先行研究の指摘のうえに、この特質が獲得された背景に、イエイツの聴衆に対する意識の変化があることを論じる。すなわち、イエイツは生涯、「大勢の聴衆を得ること」と「存在しない、理想の聴衆に向けて歌うこと」との間で揺れ動くが、この時期、彼の聴衆に対する意識は、前者から後者へと推移していったのである。この点を更に考察するために、“September 1913” (1913)を取り上げ、この詩のリフレインが、聴衆を歌に参加させ、唱和させるという伝統的な機能を逸脱しており、むしろ、詩人と聴衆の対立関係を象徴し、詩人が聴衆に向けて歌いかけることを放棄する姿勢を暗示していることを論じる。

第3章 Repetition and “Easter, 1916”では、“A terrible beauty is born”という、イエイツの詩の中で最も有名な部類に属するリフレインや、この詩の他の反復語句の機能が、これまで十分に検証されているとは言い難いことを指摘したうえで、研究の間隙を埋め、独自の解釈を示そうと試みる。この詩の語り手は、1916年に起こった復活祭蜂起の結果、劇的に変化したアイルランド社会における自らの役割を検討し、英雄へと変貌を遂げた“they”（蜂起の後処刑された15人）との新たな関係に相応しい言葉、つまり、彼らを称える歌、を作り出そうとする。しかし、この詩では、このような歌を作ろうとする語り手が、“they”の犠牲を称える行為に対する疑念によって、挫折していくことが論じられる。

最終リフレインを含むこの詩の最後の7行、そして、そこに語られる「書く」という行為には、二通りの解釈が可能である。ひとつは、語り手が、自らを民衆の期待に応える詩人へと変えることを成就させたという読み方である。この場合、語り手と“they”の関係を象徴する言葉というものが、「声」によるやがて消え去るものから、永続的な「名前の刻まれた記念碑」へと変容したとする解釈が成り立つ。そして、ジェイハン・ラマザーニやヘレン・ヴェンドラーが示唆するように、「書く」という行為が、復活祭蜂起という出来事を歴史に刻むことと同義であるという、共同体を代表する詩人としての自負を読み込むことができる。一方、この「書く」という行為を、語り手が「声」を発することが不可能であるための代替手段として捉えると、この行為は、語り手が英雄を称える歌い手としての公共的な自己像を放棄し、私的な空間に退いて詩行を書くことを暗示しているとも考えられる。最終リフレインは、蜂起者たちに対する語り手の二律背反を最も顕著に示しているのである。

第4章 Refrain and Audiences in the 1930sでは、1930年代に書かれた三つのバラッドのリフレインに、聴衆に対するイエイツの矛盾する感情が投影されていることを論じる。1910年代、20年代に、当時の政治的状況の中で分裂したアイルランド文化の統一に対する絶望感を表す詩を書きながらも、1933年の夏、イエイツは、ファシストの組織である青シャツ党を、アイルランドに文化的統一をもたらす勢力と見なし、彼らのために、後に“Three Songs to the Same Tune” (1934)という3部構成の詩にまとめられることになる歌を書く。しかし、青シャツ党に対する一時的熱狂から醒めた後、イエイツは、この詩を二度にわたって改訂し、リフレインを実際の聴衆が声を揃えて歌うためのものから、登場人物の声と解釈できるものに変更する。彼は、青シャツ党に失望した後、存在しない聴衆に向けて歌を作るという態度を取るものである。1930年代後半、イエイツは再び、「実在する、大勢の聴衆を得るこ

と」と「存在しない、理想の聴衆に向けて歌うこと」の狭間で揺れ動く。“The Ghost of Roger Casement” (1938)のリフレインでは前者が、一方、連を追うごとに、語り手が歌いかけるべき聴衆の不在が明らかになる“The Curse of Cromwell” (1937)では、後者の態度とそこから生じる不安が示される。

第5章 Refrain in the Ballads of the Late 1930sでは、晩年のイエイツが多用したバラッドのリフレインには多様な機能が与えられ、技術的な成熟が見られることを論じる。特に、“The Wild Old Wicked Man” (1939)のリフレインは巧妙に作られており、連を追うごとに、語り手の老人の戯言の裏に潜むイエイツの信念を明らかにするよう構想されている。初期において、イエイツはバラッド形式を持て余したが、晩年、伝統との連想や単純素朴な性質を保ちながらも、語り手の感情の微妙な変化を映し出すことのできる詩形として発展させ、リフレインは、その発展に寄与したのである。さらに、晩年のイエイツが、リフレイン付きのバラッド形式を発展させたことは、彼が「複雑な考えを単純な詩形で表現する」ことを理想とし、詩を伝統から離別させる事が現代的であると認識される風潮の中、その伝統と新しい関係を築くことを望んだことを如実に表している。

(論文審査の結果の要旨)

ウィリアム・バトラー・イエイツは、19世紀後半から1930年代までの長い期間にわたり詩人・劇作家として活動し、1923年にはノーベル文学賞を受賞するなど、20世紀の英語文学を代表する作家のひとりと考えられている。その活動は、19世紀末に象徴主義詩人として始まり、ついで、アイルランド文芸復興運動の主導者として、アイルランド文芸協会、国民劇場協会の設立を通じて、国民文学の確立を目指し、固有の神話や民間伝承に基づく詩作をするようになった。また、その生涯を通じて影響を受けた、神秘主義、オカルティズムへの関心も経歴の最初期に始まっている。詩人としての活動以外にも、英国からの独立運動や、独立後の政治活動にかかわり、1922年からはアイルランド自由国の上院議員も務めている。このように、アイルランドの文化や政治に深くかかわりながらも、アングロ・アイリッシュと呼ばれる、イングランド系アイルランド人の家系に生まれたイエイツは、アイルランドで多数派を占め、独立後に主導権を握ることになるカトリック中産階級との軋轢も経験し、その中で独自の詩作を模索するに至った。さらに、晩年になると、極めて難解な、彼独特の神秘思想に基づく詩を書いており、その詩の多様性は特筆すべきものになっている。

このように、文学史に重要な位置を占め、さまざまな作風を見せた詩人であるがゆえに、イエイツに関してはすでに数多くの研究がなされており、本論文が扱う反復という技法についても、個別の詩についての論考はすでにより見られる。しかしながら、そうした状況のもとで、本論文で展開されている議論は、新鮮な意義を有している。それは、以下の二点に要約することが可能であろう。

(1) イエイツという、非常に長い期間にわたって詩作を続け、また、多彩な経歴を持つ詩人による、反復の取り扱い方の諸相を体系的に分析したこと。

イエイツは、アイルランドにおける政治的、文化的状況に応じて、扱う詩の主題や形式を変化させてきた。本論文では、第1章で論じられる初期の詩から、第5章で扱われる最晩年の作品まで、イエイツの詩人としての経歴の全期間にわたって、その変化の各段階に書かれた詩の中から、反復が用いられているものを選択し、それぞれについて、特徴的な使い方をもたらしした外的な要因を考察し、これと詩のテキストの読みを丹念に重ね合わせている。この作業を繰り返すことで、時系列に沿った反復の用法の変化を、イエイツの聴衆に対する態度の変化との関連において論じることが可能になっている。これにより、論者は、従来個別の詩の分析の中で扱われ、通時的に検討されることがなかったこの用法の、イエイツの経歴を通じた全体的な見取り図を提示することに成功している。

(2) 長い時間軸に沿った反復の分析と共に、個別の詩の綿密な検討を行い、細部についての新たな解釈を提示していること。

この最も顕著な例が、第3章で主張されている、“Easter, 1916”の最後の部分に関する通説に挑戦する解釈である。この章で検討の対象となっている“Easter, 1916”は、英国によるアイルランド支配を終わらせることを目指して、1916年4月の復活祭期間中に共和主義者たちが起こした復活祭蜂起を題材とし、蜂起自体は失敗に終わったものの、英国によって処刑された首謀者たちが英雄視されるという、蜂起後に大きく変わったアイルランドの情景において、詩人がどのような位置を占めうるかを考察する詩となっている。この詩は、イエイツの代表作の一つと見なされており、多くの研究がすでになされているが、ヘレン・ヴェンドラーなどの批評家たちは、この詩を締めくくる7行を、詩の語り手による、共同体を代表する詩人としての自己規定の表明と解釈している。これに対して、論者は、この詩で使われている‘sing’と‘write’の二つの動詞の違いに着目して、この部分

を、語り手による、「口承芸術の放棄」と「私的かつ世間から距離を取った書き手としての自己規定」の二つの態度の表明と読み、むしろ、公的なアイデンティティが放棄されている箇所であるとの解釈を提示している。この解釈は、語り手が使う一人称代名詞の、“we”から“I”への移行の綿密な分析に支えられて、説得力を持って論じられており、論者の、詩の言葉に対する鋭敏な感受性と、論証の力を如実に示すものとなっている。

本論文において、論者は、個別の詩の言葉の丁寧な検討を通じて、反復という一つの技法が、長い期間にわたるイエイツの詩作において変化しながら使われ続けていたことを指摘し、その重要性を明らかにした。このように、本論文は、広い視野を持つ議論と細部についての分析を兼ね備えたものとなっている。特に、従来のイエイツ研究において欠けていた、反復の用法の体系的研究という新たな視点を導入し、それを論証した点で見るべきものがあるが、もちろん、不備がないわけではない。イエイツの詩における反復の研究を論文全体のテーマに掲げながらも、実際の検証は反復の一種類であるリフレインに偏る傾向が見られる。また、パンクチュエーションなど、語以外の要素を含めた詩テキスト細部への目配りに一層の配慮が望まれる箇所も散見される。“Easter, 1916”の新解釈についても、その正当性をより強く主張するような議論を展開させることが可能であると考えられる。しかしながら、これらは、論者の研究が今後発展しうる方向を示唆するものでもあり、本論全体の価値はこれらの弱点を補って余りある。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年8月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。